



東光寺だより

令和五年七月一日 発行

第二十五号

静岡市清水区谷田

曹洞宗 谷田山東光寺

落慶晋山式 無事円成

令和五年四月十六日 早朝

前日の夜まで降り続いた雨がやみ、雲ひとつ無い快晴となりました。朝もやの立ち込める中、侍者和尚様方と安下処の戸塚邸に向かった新命和尚は、親元、戸塚忠正様、悦子様からの篤志で仕立てて頂いた真新しい緋の衣に着替え、ご先祖供養法要を勤めた後、出発の時を待ちました。



定刻になると錦幡・新命幡を持った役員様、梅花講の皆様が列を組み、安下処を出発致しました。その行列に続いて、七十名のお稚児さん、付き添いの保護者の皆様が次から次へと笑顔で通り過ぎていきました。

そして、最後に新命和尚が歴代和尚様方も代々通られた旧東海道の難所と言われた閻魔坂を登って東光寺の山門頭に到着致しました。

新命和尚は境内に集まられた多くの和尚様方に迎えられ、木の香りが立ちこめる真新しい山門をくぐり、落慶したばかりの本堂に谷田山東光寺八世住職として上殿致しました。

新命和尚 謝辞

十年前、私は「これからの東光寺」と題した檀信徒の皆様及び地域住民の皆様方、すべての老若男女の皆様が安心して集えるお寺をめざした計画と意思を寺役員様方にお伝え致しました。思えばこの計画を檀信徒の皆様にお伝えしようとした矢先に先代住職が遷化した計画の見直しが必要となりました。

話し合いの結果、多くの御寺院様方をお迎えるための客殿「思親殿」の建設を優先させて頂きました。しかし、今振り返れば客殿のなかった当山に客殿が建立された事により、檀信徒様の葬儀が通夜から本葬儀その後の精進落としてまで寺で行える事ができるようになりました。これも先代住職の仏縁であったと感謝致しております。

本葬儀から一年後、老朽化し手狭となった本堂・山門の新築について協議を再開し、一年間の話し合いを経て、檀信徒の皆様にご計画をお伝えした半年後、今度は未曾有のコロナ禍の世となりました。檀信徒の皆様にお願ひさせていただいた三年間の浄財受付期間はこちらようどコロナ禍の世であり、感染に対する不安と不安定な社会情勢の中、本堂に大変な不安と思えます。にも関わらず皆様から多くの浄財・篤志、そして温かな励ましのお言葉を賜り、このように計画から十年目の春、無事、落慶晋山の盛儀を務められたこと心より感謝申し上げます。

当山に入ってから十五年、先住から受け継がれた相承の思い、そして、多くの方々の助け、

励ましの有難さを感じ、つくづくこの世は支え合い励まし合いの中で自分自身が生かされている存在なんだと実感致しております。これからも、当山八世住職として地域の信仰の対象となる御堂、仏教を学び、よき生き方を学び合える道場として東光寺があり続けられるよう一つ一つの法務、日々の檀務、布教教化活動に精進して参ります。徒弟泰平共々宜しくお願い申し上げます。



八世新命 泰光 合掌

七月二十九日(土) 午前十時より、四年ぶりに一般檀信徒の皆様にも参加していただける山門大施食会法要が行われます。教区及び法類の御寺院様にお集まりいただき「甘露門」という施餓鬼供養の読経をしていただく事で、皆様のご先祖様供養に加え、参列された皆様方の福寿円満と延命長寿の御利益を得られる大法要です。

今回は八世新命和尚の晋山結制(百日間の修行)を解く解制法要も併せて行います。この法要をもって晴れて新命和尚は大和尚の位に就きます。

引き続き行われる護持会総会では、今回の建設及び晋山式に関する会計報告と、これからの本堂と客殿の活用の方針についてご説明させていただきます。多くの檀信徒の皆様のお越しをお待ちしております。

晋山式、落慶式に引き続いて、首座和尚（新命和尚の一番弟子）が多くの僧侶の問答に答える法戦式が行われました。

今回は首座を務めた東光寺の徒弟、泰平が法戦式を終えた心境を書き記した感想文を掲載致します。

しゅそ ぼつせんしき

首座法戦式を終えて

法戦式で首座を務めるということは、私にとって人生で越えなければならぬ試練の様なものだと思われ続けてきました。私が初めて首座という役割を知ったのは十歳の頃でした。

本寺桃原寺の法戦式で弁事を務めた際に「泰平もお坊さんになるためには、大きくなったらこの式の主役を務めなければいけないんだよ。」と父である住職から言われました。幼かった私は弁事を務めることでも精一杯でしたから、さらに難しそうな配役を私が務めることができるだろうか、将来の自分に不安を感じたことを今でも覚えていています。



平成二十三年十一月

桃原寺晋山式にて
弁事を務める泰平

あれから十年が経ち、二十歳になった私ですが、首座という配役の難しさはもちろん、初めて檀家の皆様や多くのお坊様方の前で法要の主役を務めるという現実には直面し、あの頃とは違った不安を覚えました。皆様の期待と共に、この式をより良いものにしようと毎日身を粉にして働く両親の姿を目の当たりにしておりましたので自分の役割がいかに重要なものなのかを再認識させられ絶対に失敗できないという重圧に悩まされた時期もありました。

今年の二月、大学が春休みに入り帰省した私は四月の式に向けて本格的に練習を開始しました。首座の指導役である書記を務めてくださった普濟寺住職の平尾隆朋和尚の指導の下、所作から問答までを一つ一つ習い、身につけていきました。隣寺の隆朋和尚には以前から何かとお世話になっており、今回も動きや発声の仕方などの基本的な部分から、首座としての心構えまで丁寧に、しかも親身になってご指導していただきました。明るく親切な隆朋和尚から教わるうちに、私の心の重圧は軽くなり、学んだことが自信に変わっていくのがひしひしと感じられました。

当日の朝、多少の不安や緊張はありましたが、檀家の皆様や家族、お世話になった方々に今の自分を見てもらい安心してほしいという前向きな気持ちで臨もうと思いました。



法戦式で問答に答える泰平

そして、本番は私のこれまでの人生で最も多くの方々に見守られる中で、今の自分のできる精一杯の力で首座を務める事ができたと思っております。

今、法戦式を終えて、次に見据える越えなければならぬ人生の山場は、二年後の大学卒業後に控える大本山永平寺の本山安居（修行）です。おそらく私の生涯で最も過酷な経験になるであろうと思いますが、この首座を務め上げた自信を胸に、将来の東光寺の住職として恥じぬように必ず乗り越えて行く覚悟です。

まだまだ未熟では在りますが、今後皆様様の期待に添えるように精進して参ります。

東光寺徒弟 泰平 合掌

